

# 深海底生物の観測成功

深海底の泥の中に潜む生物の生態を明らかにしようと、水野勝紀東京大准教授（環境情報計測学）らの研究グループが超音波を使った現場観測装置を開発し、熱海市の初島沖でシロウリガイの生物分布を確認する実証実験に成功した。グループは酸性化などに敏感な底生生物を新技術により継続観察することで、海洋環境の変化を知ることができるようになる。

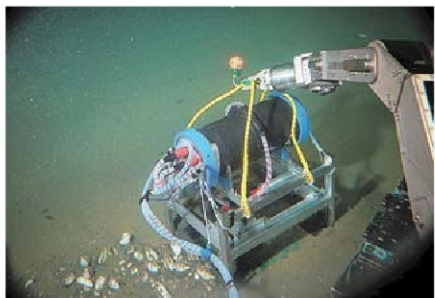


## 熱海・初島沖で東大准教授ら

研究室で新開発の現場観測装置を調整中の水野勝紀准教授

19日午前 千葉県柏市の東京大

## 超音波使い 泥内非接触



観測に成功したのは初島の相模湾の深海（水深約900～1200メートル）にあるシロウリガイのコロニー。国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）の有人潜水調査船「しんかい6500」に乗り込み、ロボットアームを使って高周波の超音波を発する新開発の装置を用いることで、泥の中に埋まっている幼体の様子を3次元的に非接触で確認した。

シロウリガイのコロニーで泥中の幼体分布などを調査する新開発の装置（熱海市の初島沖）（JAMSTEC提供）

深海底の熱水の噴出する場所に密集する二枚貝のシロウリガイの幼体は成体と異なり、殻が完全に海底下の泥に潜った状態で生息する。このため光学カメラなどで確認することは困難だった。実証実験では生物に

対して非接触・非破壊で幼体を含む約17個体のシロウリガイの空間分布とサイズを把握した。

グループは新技術が日本で最も深い駿河湾の海底などの様子を明らかにすることも期待する。水野准教授は「深海底の資源開発や気候変動が底生生物に与える影響、そうした生物が大きな役割を果たす物質循環の理解にも役立つ」と述べた。研究グループはこれまで、浜名湖の弁天島にある県水産・海洋技術研究所浜名湖分場などで新しく開発した装置を使った実験を繰り返してきた。

（清水支局・坂本昌信）